

世界平和の危機に際して、すべての会員によびかける

いま世界中が中東湾岸危機の行方に注目している。国連安全保障理事会は去る11月29日、ついに中東湾岸危機の解決に武力を用い得る新しい決議を行った。もとよりイラクのクウェート侵攻は、いかなる理由をもち出しても正当化することはできない。われわれは、イラク軍が無条件に即刻クウェートから撤退することを断固として要求する。しかし同時にわれわれは、今日の湾岸危機の軍事的解決をはかろうとするいかなる動きも絶対に認めることはできない。すでにイラクのフセイン、アメリカのブッシュ両大統領は、大きな惨禍をもたらす毒ガスなどの化学兵器や核兵器の使用もありうることを公言するところまできている。また、軍事衝突の結果は、諸国民の生活に甚大な影響を及ぼすことも明らかである。

われわれは今回の国連決議が、皮肉にも「冷戦の終結」という国際的ムードの中で行われたことに重大な関心をもつ。ソ連の無原則的な協調路線や、中国の「天安門事件」などにみられる非民主主義的状況の間隙をぬって、アメリカが世界の憲兵的役割を増大させ、国連の場を利用して国際支配の野望をとげようとしていることは明らかである。今回の国連安保理決議678は正にその路線に沿ったものであり、世界平和とは無縁のものである。

人類は今世紀に、2回にわたる世界大戦やその後の数々の国際紛争を通じて、紛争の軍事的解決がいかに愚かな選択であったかを教訓として得たはずである。今またこの中東湾岸危機を平和的に解決できないとすれば、人類の進歩に対する重大な障害をもたらし、再び核や軍事ブロックの拡大競争へと逆行しかねない。とりわけ日本国民は、みずからの体験を通じてその危険を声を大にして訴える国際的責務を有する。

本日、日本科学者会議幹事会は、現時点での中東情勢について討議したが、その行方如何によっては、戦争か平和かの歴史的に極めて重要な時期にあり、今こそ本会の世界平和への貢献が求められていると判断した。

日本科学者会議は、12月4日をもって創立25周年を迎える。本会はその創立以来、会の目的のひとつとして世界平和に貢献することを掲げ、一貫してその努力を払ってきた。世界の平和と人類の進歩にむけ、今こそわれわれは一人ひとりが自己の努力をもって、この創立の精神を全面的に発揮しなければならない時と考える。

ここに幹事会は、本会会員全員に対し、全力を挙げて世界平和のために立ち上がることを呼びかける。本会会員はもてる英知と努力を結集し、中東湾岸危機の平和的解決のためのイニシアチブを率先して発揮しようではないか。

1990年12月2日

日本科学者会議幹事会